

【宮内省告示第二十九號】 皇太子妃殿下本日

午後八時十分東宮假御所に於て御分娩

内親王御誕生あらせらる

大正十四年十二月六日

宮内大臣 一木喜徳郎

御母子共お健やか

皇太子妃殿下にはかねて御妊娠にわたらせられ、その後順調の御経過をとらせられて月を重ね十二月六日午後八時十分皇孫女子めでたくも御誕生あらせらる、げにわれら國民翹望の大慶幸事、赤坂御所の内外によるこびは充ち、瑞氣あふるゝを見る、榮光にかゞやく萬世一系のたふときみすぢを傳へて、津々浦々のいやはてまで滿歡喜にとよめきわたり、仰げは殿上高く皇孫生誕の夜は古きもの語りをそのまゝに月まだ見えぬ大空に明星高く爛として輝いた。

◆お産聲呱呱とその刹邦お側の人々思はず感激に涙す、妃の宮御産氣お催しと拜したのは六日午後三時ごろで初冬の風冷えくくと樹葉をふくうすら寒い日であつた、玉體まれにもすこやかに順調の経過にお

はしたこととて俄の事にもそれとうたがひなきまま家原侍醫ならびに急きよお召しになつた磐瀬御用掛
かりは共々に拜診申し上げたところ、陣痛發作の御模様、間歇の時間など、はや御分娩第二期も間近く
すゝんでをられたので、おそばにつきそひまゐらせてゐた助産婦梅林寺幸子、坂田明子の兩女はいさゝ
かのうろたへもなく、共に白帽白衣の消毒した助産婦に著かへのうへ、二名の看婦婦とお左右から介ぞ
ひまゐらせたので、妃の宮には殊にごきけん晴れ々として靜かに淨らかな御産殿にお入りになられた
御産殿には兩助産婦と二人の看護婦の外、島津女官長身じまひかたく肅として控へた、妃の宮には直ち
にゆるやかな雪白の御産著に御更衣あり、いつもは仰ぎ見るみどりのおぐし、一すぢの亂れをさへ拜せ
ぬ端麗なお束髪も、坂田明子の手に櫛卷の形とあげられ上をば白羽二重の紐もてキリ、と堅くお手づか
ら結ばれたとうけたまはるだに沈著におはすふだんの御態度、妃の宮のいまさらに御母性とならせ給ふ
力強き御意氣のほどもしのばれる、斯くて時移ればやみ夜の大空をついて、煌々とはなやかに灯の色は
赤坂台の一面を明るく浮かせた、いひしれぬ緊張の氣は御所をこめて時こまやかにさざみゆけば、もの
靜かな中にさゆらぐ御よろこびのおとづれば參殿の高官、仕人達の胸にも明るい豫感を滿々とみなぎら
せ、折柄潮時よしとみて奥殿の一室には山岡、青山、油小路の高等女官たちは齋戒沐浴の身をしづかに
燭幣をさゝげて安産の護符に念願をこむる折柄、大奥の空氣俄にさゞめき立ち、すはや高朗たるお産聲
呱呱として、殿程にさえ、内親王さまはいまし安らかに御誕生になられたのであつた、尊きみすぢをう

けつぎ給ふれいろう玉の如き尊き御姿よ、その一瞬、天地萬象を壓してげに神嚴崇高かぎりなく御左右みなぞるる感激の涙のわくをおぼえた、

◆御まるくくと愛くるしさ御體量八百七十三匁、御身長一尺六寸三分御後産も滞りなく。

内親王御誕生と同時に控への磐瀬博士は直ちに『午後八時十分内親王御誕生』と記録しまつり、とりあへず塚原博士は内親王さま御誕生後一切の處置を滞ほりなく済まされ、看護婦のすゝめまゐらする楢づくりの大たらひにたゝへられた御産湯を召させ參らす、丸々としてつやゝかなふとりじしの長けれど御みめかたちは御兩親宮に似かよはせられ殊の外の愛くるしさ、母宮様の御健康をうけて御發育いとも見事に御體量八百七十三匁、御身長一尺六寸三分と拜される、なほ母宮には九時二十五分御後産も滞りなく済ませられすこぶる御健康に拜察される。

◆御産後御順調【磐瀬御用掛發表】東宮妃宮殿下は午後三時四十分御産殿に移らせられ漸次御陣痛重くならせられ午後八時十分内親王御分娩あらせられ九時十分御後産あり同二十五分滞りなく御後産ををはらせられ御産後の御經過順調にて何等御異狀あらせられす。

◆けふ「紅の間」に御劍を賜ふの儀皇孫初の御儀式

内親王殿下御誕生につき初の御儀式として今七日午前十一時御所内紅の間において『劍を賜ふ』の儀が行はせらるゝが、この日定刻松浦侍従は勅使として御劍並に御袴を捧持して御所に參入、本多事務官

は紅の間に誘引し珍田太夫に面接の上御劍御袴を受け更に太夫は東内謁見所に參進東宮殿下の御前において勅使の傳宣を言上後、太夫は御劍を皇孫御休所に奉じ島津女官長これをやうやく皇孫殿下に奉る次第である、なほ十二日午前九時に『三殿奉告の儀』『浴湯の儀』があり、同午前九時五十分には『命名の儀』がある、三殿に謁する儀は明春一月二十四日である。(東京日日新聞による)

宮内省告示第三十三號

本月六日午後八時十分御誕生在らせられたる内親王御名を成子と命せられ照宮と稱せら

大正十四年十二月十二日

一木喜徳郎